

「小さな家シリーズ」：近代資本主義の始まり

福 田 二 郎

ローラ・インガルス・ワイルダーは、アメリカ西部開拓の生活を描く不朽の名作*Little House on the Prairie* (1935)を出版した翌年、自分の作品にこめられた思いを以下のように述べている。

Running through all the stories, like a golden thread, is the same thought of the values of life. They were courage, self-reliance, independence, integrity and helpfulness.¹

「勇気」、「自分への信頼」、「独立心」、「正直」であり「人の役に立つこと」、これらが子供たちに向けてという気持ちがこめられた、長い開拓物語のテーマになった。

さらにその翌年、作家と読者を招待して交流の機会をもうけようという出版社の企画で、ローラは読者、子供たちに向けて以下のように語っている。

I began to think what a wonderful childhood I had had. How I had seen the whole frontier, the woods, the Indian country of the great plains, the frontier towns, the building of railroads in wild, unsettled country, homesteading and farmers coming in to take possession. I realized that I had seen and lived it all—all the successive phases of the frontier, first the frontiersman, then the pioneer, then the farmers, and the towns. Then I understood that in my own life I represented a whole

period of American History.²

ローラは自分の生涯が、アメリカの建国、そしてその発展の歴史の1コマを典型的に現すものだと自覚したとき、その様子を描きながら、背後にある価値観、彼女の考える「大事なもの」を後世の子供たちに伝えたいと思った。本論では、上記のようにローラが意識していたものと並行して、西部開拓の精神が近代資本主義精神を生み出してゆく構図を考察したい。

6作目である*The Long Winter* (1940)のなかで、開拓者チャールズ・インガルスは厳しい冬を迎える大草原で、幼い娘ローラに以下のように語る。

We're humans, and, like it says in the Declaration of Independence, God created us free. That means we got to take care of ourselves.³

「自由と独立」という言葉は、この作品の中で繰り返し語られるキーワードである。それがどのようなものであったのか、もう少し詳しく探ってゆぐために、まずは物語の中で描かれる職業観について考察してみよう。

シリーズ2作目の*Farmer Boy* (1933)では、のちにローラの夫となるアルマンズの幼少期が描かれている。少年アルマンズは彼にとって魅力ある馬車製作所に弟子入りを誘われるが、彼はそれを断って農民になることを決心するところで物語は終わる。

アルマンズは隣人トンプソンの財布を拾って正直に届けた。卑しいトンプソンは礼を言うどころ

かアルマンゾが金を抜き取っていないかを確認、その態度に誇り高い少年は激怒するエピソードがあった。そのトンプソンが馬車製作所を客として訪れていたのである。アルマンゾの目の前に、農民である父、馬車商人のパドック、卑しむべき金持ちのトンプソンの3人がいた。

開拓が進む西部地方では、馬車の需要は高まっており、木工に興味があるアルマンゾにとって、成長産業の職人への弟子入りは決して悪い話ではなかった。事実馬車製作所経営者のパドック氏は、大きな農場を営むアルマンゾの父より収入が高かったようである。商人は寒い冬に外に出る必要はなく、天災におびえることもない安定した職業だ。しかし幼いながらもアルマンゾの心は決まっていた。

[Almanzo] 'd rather be like Father than like anybody else. He did not want to be like Mr. Paddock, even. Mr. Paddock had to please a mean man like Mr. Thompson, or lose the sale of a wagon. Father was free and independent; if he went out of his way to please anybody, it was because he wanted to.⁴

商人は軽蔑すべき人間にも頭を下げなければならないだけではない。人間が生きてゆくための食べ物を人に頼らなければならない。そういう意味で、農民こそが本当の「自由と独立」を手に行っているというのである。

アルマンゾの家、開拓農家の生活を見てみよう。彼の家はすでに様々な家畜を所有し、毎年多くの収穫を得ている豊かな農家だ。食事の際は、まず家族全員が頭をたれて上座の父親がお祈りをし、食べ物は父親が家族の年齢順に配ってゆく（末っ子のアルマンゾは最後だ）。食事中に子供たちは決して話をしてはいけない。前述したアルマンゾが「農民になりたい」と意思表明をするのは、彼にとって生まれて初めて父親に自分の希望を話してよいと許可された記念すべき出来事で、この物

語の最後を締めくくる一大イベントなのであった。

安息日である日曜は、少年にとって苦行の日である。教会では退屈な牧師の話をじっと聞いて目を離してはならず、礼拝が終わって外に出ても一日中、遊ぶどころか走ったり笑ったり大きな声を出してもいけない。町で会った同世代の友達が都会の町で買ってもらったという帽子に憧れても、そのような虚栄心は厳しく禁止されているのだ。キリスト教、わけても厳格なピューリタニズムの影響力が大きいのである。

独立記念日のお祭りに行ったとき、アルマンゾは友人が飲んでいる冷たいピンクのレモネードをとて飲みたくなった。彼は必死の思いで父親に小遣いをねだる。父親は50セントを彼に与えるが、「金」は「労働」を意味するものであり、50セントは長い労働の果てに収穫したバケツ何杯ものじゃがいもに相当するものだと言ふ。例えばこの小銭で子豚を買って育てれば、いずれそれは何倍の価値にもなるのだと言ふ、レモネードを消費するという短期的欲望を思い留まらせるのである。これはマタイによる福音書の「タラントのたとえ」を彷彿させる。そのエピソードでは、預かったお金を消費するどころか、しっかりと埋めて大事にとっておいた者は怠惰であると非難され、預かったお金を運用して増やした者が称賛されるのである。

収穫祭では、アルマンゾは大変な苦勞をして大きく育てたかぼちゃが一等賞になった。彼の姉たちも手芸の部で賞を取り、ワイルダー家は多くの栄誉を勝ち取った。しかし3日間のお祭りは、アルマンゾにとって長すぎる休日であり、彼は農場での日々の忙しい仕事に戻ることを望むのであった。このようなワイルダー一家の生活、その価値観を見てみると、色濃いピューリタニズムの宗教観の影響と共に、節制、沈黙、規律、決断、節約、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、平静、純潔、謙譲といったもの、すなわちアメリカ建国の父と言われるベンジャミン・フランクリンの「十三徳」そのものを思い起こさせる。

こういった道徳観、倫理観は、世俗的な禁欲を

重んじ、トンプソンのような卑しさはもちろん、パドックのような商売の利益といったものも重視せず、ひたすら誠実さ、勤勉さ、控え目な節制を大切に考える。しかしその倫理観が、結果として富をもたらすという、近代的な「資本主義の精神」を生み出す結果になるということはマックス・ヴェーバーが指摘したところであるが、⁵詳しくは後に考察する。

次にインガルス家のローラに注目し、女性の視点から「自由と独立」という人生観を考察してみよう。前述したワイルダー家の道徳観、倫理観に見られるように、もともとこのシリーズは、アメリカの保守的な伝統的価値観に満ちている。すなわち愛国心、ピューリタニズムに基づく倫理観、勤勉、家族の絆の重視、その中ではっきりとした年齢別、性別の役割分担（もちろん厳格な家父長制）などである。⁶したがってローラの両親は、娘たちには家の仕事は厳しく手伝わせるが、外の賃金労働に関しては反対である。そもそも女性の経済的自立というものは想定されていない時代だ。

隣人が何キロも離れていることもあるような西部開拓地では、もちろん公教育制度はまだ整備されていない。それゆえに、とりわけ女性は、子供たちに教育を受けさせることに熱心であった。⁷ときには何時間も歩いて集まってくる生徒たちが学ぶ学校は、床のない丸太小屋なら良いほうで、芝土を積み上げて造った小屋や、土手に掘った横穴の家ということもあった。

教員の資格は男女に開かれていたが、資金は寄付や持ち寄りでまかなうために給料は極めて低く、家計の足しにする程度で、教員のほとんどが女性であった。⁸この物語では、ローラが15歳のときに初めて教職の仕事を得ている。しかし当時、唯一といっていい女性にとって恥ずかしくない仕事である教職は、一般的に結婚するまでの短期間のアルバイトであった。実際にローラは結婚を前にして、姉のメアリーに以下のように言っている。

I'm eighteen now and I've taught three terms of school, that's one more than Ma

taught. I don't want to teach any more. I want to be settled this winter in our own home.⁹

女性が社会的な尊敬を受けるのは「妻」となり「母」となることであったため、女性は経済的に「自立」することは想定されていない。¹⁰独立心を持って未婚で働き続けることは、むしろ「オールド・ミス」として憐れまれた。¹¹ローラは「しかたなく」裁縫や教師の仕事をして家計を支えるが、上記の引用にあるように、彼女の希望は「家に入ること」、すなわち専業主婦である。

このシリーズ最後の大団円は、ローラとアルマンゾの結婚式である。西部開拓地の草原で育った幼い子供が「一人前の女性」として、社会的に認められる存在になる大きな節目である。そのとき、プロポーズをしたアルマンゾに対してローラは勇気を振り絞って言うのであった。

“Almanzo, I must ask you something. Do you want me to promise to obey you?”

Soberly he answered, “Of course not. I know it is in the wedding ceremony, but it is only something that women say. I never knew one that did it, not any decent man that wanted her to.”

“Well, I am not going to say I will obey you,” said Laura.

“Are you for woman's right, like Eliza?” Almanzo asked in surprise.

“No, Laura replied. “I do not want to vote. But I can not make a promise that I will not keep, and Almanzo, even, if I tried, I do not think I could obey anybody against my better judgment.”

ローラは結婚式での誓いで「夫に従う」という言葉を発したくないと言う。アルマンゾはそれが単なる形式的な習慣であり、今では誰も従うわけではないと理解を示すが、ローラは一步進んでその

形式をも打破したいという。

アルマンゾは、ローラが自分の姉のイライザのように、がちがちの女性権利主義者なのではないかとひるむ。イライザは前述したように、教師として経済的に「独立」した、口うるさくて嫌われる、典型的なオールド・ミスのステレオタイプなのである。しかしローラは投票権には関心を示さない、特に男女平等を求める女権論者なのではなかった（それでは当時の子供向けの小説としては成り立たなかつただろう）。ただローラは、当時の形式的な伝統、因習には抵抗を感じて、場合によっては打破していきたいと考える、「基本は保守で、穏健な革新」という姿勢であった。

では次に、ローラが幼少の頃からどのようにアメリカの保守的な伝統に対峙してきたかを見てみよう。シリーズ最初の作品 *Little House in the Big Woods* (1932) では、アルマンゾの子供の頃と同じように、子供らにとっての日曜日の苦行が描かれている。遊ぶどころか、走ったり、大きな声を出したり、おもちゃで遊んでもいけない。活発なローラが癩癩をおこしたところで、チャールズはもっと厳しかった自分の子供の思い出を話すのであった。例をあげれば、日曜の朝は料理もしてはいけないので冷たい食事をとり、馬車を用意するのも「仕事」だから教会には歩いて行く。歩くのもよそ見はせず静かに前を向いてだし、礼拝では牧師から目を離さずに、びくりともしてはいけない。

そして母のキャロラインは、かつては女の子にとって、さらに厳しかったという。日曜日のみならず、女の子は常に「小さいレディー」でなければならない、男の子のように外で遊んではならず、家の中でじっと裁縫のなどをしていなければならなかつたのだ。¹²この両親は自分の子供の頃に比べて、かなりリベラルになっていたと自覚している。それでもローラの活発な性格をある程度は受容している父に対して、母はかなり保守的である。未開の地を進んで行きたいチャールズに対して、キャロラインは「文明」のある町に落ち着いて、子供たちに文化的な生活をさせたいと望んでいた。

どこの世界でもそうかもしれないが、母キャロラインはしつけに厳しい。入植地を求めて一家が広い大草原を旅しているとき、大地の真ん中で食事をしているときに、吹き抜けるこちよい風を感じながら鳥のさえずりを聞いて、ローラはあまりの気持ちよさに鳥に声をかける。そこで母は注意する。

“Eat your breakfast, Laura,” Ma said.

“You must mind your manners, even if we are a hundred miles from anywhere. … it isn’t good manners to sing at table. Or when you’re eating,” she added, because there was no table.¹³

テーブルがないところで「テーブルについているときには～」とキャロラインが言ってしまったのはご愛敬だが、誰が見ていないところでもレディーとしてのマナーを守ることには大変厳しい。

頭をすっぽり隠すボンネットは視界を遮るので、ローラは首から後ろに下げたがるが、キャロラインはそれを許さない。¹⁴また熱波に苦しむ夏も、何重もの下着、きつく締めた胴、襟のつまった長袖といった服装をさせられ、現在ではほとんど虐待と言われそうなほどの徹底ぶりである。¹⁵これらは他人が全くいない大草原の真ん中である。また鉄道工事現場の近くに住んでいるときには、母は娘たちが野蛮な労働者たちに近づいてほしくなかつた。工事の様子を見物したいローラに対して、母は以下のように注意する。

She said that she wanted her girls to know how to behave, to speak nicely in low voices and have gentle manners and always be ladies.¹⁶

このような母親の厳しいしつけに対して、本来活発なローラはボンネットをそっと首の後ろに下げるし、男の子とボール投げはするし、走り回って遊ぶことが大好きな「お転婆」だ。一家が大草原

を馬車で移動しているときには、わざと馬車から離れてひとりになり、「この大草原はわたしたちのものよ！ぜんぶわたしたちのものなのよ！」と大声で叫ぶのである。¹⁷

「小さな家シリーズ」のアメリカ文化に対する影響力を考察したフェルマンは、このシリーズに現れるテーマのひとつはローラが両親の価値観から離脱してゆく点にあると指摘している。¹⁸だが、作者のローラはアメリカの伝統的な道徳観や価値観に対して必ずしも「保守」ではないにしても、大変好意的に描いていると言っている。¹⁹たしかにアンビヴァレントである。娘が成長期に母親の価値観と対立し、また社会の習慣や因習にぶつかり、それを乗り越えて精神的に自立してゆくというのはよくあるテーマである。ローラの場合は自分の天性の自由奔放さを否定する母のしつけに疑問を感じるし、アルマンゾの求婚に対しては、結婚式での「夫に従う」という言葉を拒否する。しかし根本的には、当時のアメリカの伝統的価値観には反対していないのである。

アメリカの保守的志向、家庭中心主義やジェンダーの役割、愛国心、宗教観などに関しては、行き過ぎた因習や理不尽さに若干の反発を持つことはあっても、ローラはそこから逸脱した人生を送ろうとは全く考えていない。このシリーズはローラが初老を迎える年になって、自分の人生を振り返り記録をとどめようと執筆に至ったことは前述した。それが自身の結婚で終わっているのである。結婚生活や子育てといった人生、また夫婦の開拓生活は、その後も続いているのだ。

なぜシリーズが結婚に終わっているか。それは世界中に見られる「シンデレラ伝説」のテーマの裏にある、「女性の人生の選択肢のなさ」を反映しているのであろうか。西部開拓の時代は、表面上男性社会であり、女性が中心となって冒険をしたり財や社会的地位を得てゆくという可能性は非現実的である。結婚後は、伝統的な「夫を支える良き妻、そして良き母」というステレオタイプだ。すると女性の関心はもっぱら「結婚まで」ということになる。英国の女性作家ジェイン・オーステ

インの小説のように、結婚までが（つまり夫の選択までが）波乱に満ちた、つまり人生の転び具合がどうなるかわからないドラマになるのであって、結婚後は描こうという対象にならないのであろうか。ローラが言ったように、このシリーズはアメリカ建国、西部開拓の歴史の1コマを記録に残し、その背後にある価値観を描きかかったというのであれば、ローラとアルマンゾが苦勞して続けてゆくその後の西部開拓の生活も、大変波乱に満ちた歴史を刻んでいるのだが。子供向けの話ならば、結婚前の時代だけが描かれるべきだと考えたのだろうか。

ローラの結婚後の生活は、仕事を続けることではなく「家に入ること」、すなわち専業主婦を希望していることは前述した。自立心、独立心を非常に大事にしながら、いわゆる「専業主婦」のような生活を夢見る女の物語といえ、英国の小説家、シャーロット・ブロンテの *Jane Eyre* (1847) が思い出される。

親を亡くした少女ジェインは、意地悪な継母の下を出て、家庭教師として精一杯の自立をする。その後、妻のいる貴族に二重結婚を迫られるが、彼女は「愛人」として豊かな生活を得るよりも、自尊心を保つことを選んで逃げ出し、牧師の下に身を寄せる。そこで教師をしながら暮らしてゆくが（それ以外に職業選択の余地がない）、そこでささやかな給金とやりがいを得ても、ジェインは精神的に満たされることはない。のちに思わぬ遺産を手にしたとき、彼女が牧師の姉妹に語る希望は、まさに家庭に入った「専業主婦」の生活なのである。

“My first aim will be to *clean down* (do you comprehend the full force of the expression?) — to *clean down* Moor House from chamber to cellar; my next to rub it up with bees-wax, oil, and an indefinite number of cloths, till it glitters again; my third, to arrange every chair, table, bed, carpet, with mathematical precision;

afterwards I shall go near to ruin you in coals and peat to keep up good fires in every room; and lastly, the two days preceding that on which your sisters are expected will be devoted by Hannah and me to such a beating of eggs, sorting of currants, grating of spices, compounding of Christmas cakes, chopping up of materials for mince-pies, and solemnising of other culinary rites, as words can convey but an inadequate notion of to the uninitiated like you. My purpose, in short, is to have all things in an absolutely perfect state of readiness for Diana and Mary before next Thursday; and my ambition is to give them a beau-ideal of a welcome when they come.”²⁰

少々長い引用となったが、それは部屋を飾りたてること、台所の「儀式」などに対する並々ならぬ執着心を指摘したかったからだ。

ローラも裁縫が大嫌いで、台所の皿洗いなどは苦行そのものであるという「お転婆」な、すなわち女の子に厳しい習慣、道徳には反発を感じる少女であったと描かれている。それにもかかわらず、衣服や家具などについては強い関心、執着心を示している。

姉のメアリーが大学に行くことが決まったときには、きちんとした服を作るのに母とローラは大変な準備をする。夏の灼熱の部屋で、型紙からすべて手縫いで、それは気の遠くなるような集中力を要する作業だった。また人づてに伝え聞く噂では、東部の都会ではスカートにフープ（輪骨）を入れて膨らませるのが流行っているという。しかしそれを確かめるための婦人雑誌もなかなか手に入らない。2人は肉体と神経をすり減らす悪戦苦闘の末、ついにメアリーの服を完成する。

Now the basque of Mary's best dress was ready to try on for the last time. It was

brown cashmere, lined with brown cambric. Small brown buttons buttoned it down the front, and on either side of the buttons and around the bottom Ma had trimmed it with a narrow, shirred strip of brown-and-blue plaid, with red threads and golden threads running through it. A high collar of the plaid was sewed on, and Ma held in her hand a gathered length of white machine-made lace. The lace was to be fitted inside the collar, so that it would fall a little over the top.²¹

さてこのような服の細かな長い描写のあと、コルセットをきつく締める作業が始まる。メアリーは息を止めて、母と妹ふたりがかりで締め上げねばならないのだ。ローラは朝からベッドに入るまで、コルセットの苦行が大嫌いであるが、母親は本来寝るときもつけていなければならないものと論ず。キャロラインが結婚するときには、チャールズが両手で胴回りをつかむことができたというのだ。

さて新調のドレスを着たメアリーが“Do I really look so well, Ma?”と聞いたとき、母親は“For once Ma did not guard against vanity. “Yes, Mary, you do.””と応える。²²「そうよ、メアリー、素敵よ」というセリフの前の「このときだけは、お母さんは虚栄心を気にかけることはなかった」という描写は、横で見ていたローラの解釈である。娘は、母が「贅沢」や「虚栄心」を極度に警戒していることをよく知っているのだ。

敬虔なキリスト教精神、とりわけ厳格なピューリタニズムの影響による節制、虚栄心への警戒が、この人里離れた西部開拓地では守られている。しかし執念と言えほどの飾り立てた衣服へのこだわり、きつく引き締めた胴などへの執着心と、それは共存できるものだったのか。この微妙な関係を整理するにあたっては、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1920）が役に立つ。

ヴェーバーは近代資本主義を生み出した土壌には、プロテスタンティズム、なかでも特にカルヴィニズムによる禁欲の精神があったと分析した。キリスト教では、神に受け入れられる「恩恵の地位」を得ることが重要である。従来カトリックでは教会の影響力が絶大であり、信者は教会が管理している懺悔によって罪の赦免を求めた。その権威に異議を唱えるプロテスタントは、非日常的な修道院内の倫理を、世俗の生活の中にもたらした。それによって、「個々人にとって、恩恵の地位を保持するために生活を方法的に統御し、そのなかに禁欲を浸透させようとする起動力が生まれてきた」というのである。²³聖職者の生活のメンタリティが、一般家庭の中に持ち込まれたというわけだ。

ローラは独立の精神を重要視しながら、それには現代的な経済的自立は含まれず、いわゆる「専業主婦」の生活を求めた。気をつけねばならないのは、それはあくせく働く必要のない「贅沢」や「安楽」を意味するのではなく、男は農作業、女は家の仕事と分業が確立したなかで、家の管理のために、むしろ苦行をものともせず、片時も休むことなく働き続けることを意味していた。つまりそれが人に頼ることなく、節制と禁欲を重んじ、自主独立の生活を組み立てることだったのだ。どんなに生活が苦しくとも、衣食住を立派に整えること、その作業に全身全霊をこめて努力すること、それがもっとも大事だったのだ。ふたたびヴェーバーを引用する。

道徳的に真に排斥すべきであるのは、とりわけその所有の上に休息することで、富の享樂によって怠惰や肉の欲、なかんずく「聖潔な」生活への努力から離れるような結果がもたらされることなのだ。(中略)明白に揭示された神の意思によれば、神の栄光を増すために役立つのは、怠惰や享樂ではなくて、行為だけだ。したがって時間の浪費が、なかでも第一の、原理的に最も重い罪となる。²⁴

たしかにインガルス一家は決して「休息」した

り、「時間の浪費」をすることはしない。片時も休まずに、常に全力で生活を整えようとする。天災に伴う恐ろしい物資の欠乏や飢餓を経験したあとで、比較的安定した生活を送ることのできる年にも、少しのんびりするどころか、さらなる努力に励む。

開拓居留地に人が増え、新しい学校が建てられることになった。ローラは「どれだけ教室のなかにいるのが嫌」であろうとも、全力で教員免許更新の試験に臨み、3ヶ月間、月に25ドルの教職ポストを得る。²⁵「仕事のやりがい」どころではない。どれだけ嫌であろうとも、家族のために(決して自分のためではない)不断の努力を惜しまないのである。その仕事によって得た収入はどのように使われたのか。このシリーズでは様々な金額について、こまかい計算などの描写が出てくるが、特にローラが成長してくる後半では頻出する。

ローラのはじめてのおつかいは、父が草刈りをしているときにこぼれてしまった機械の刃を町に買いに行かされるときだ。緊張して持っていった金額は5セントで、そのときは13歳頃。²⁶「叫びたくなるほど」大嫌いな裁縫だが、町のシャツ作りの手伝いを頼まれて、朝から丸一日の作業で1日25セント、6週間で9ドルを稼ぐ。このとき14歳。

She had worked six weeks and earned nine dollars. One dollar had seemed a great deal of money only six weeks ago, but now nine dollars was not enough. If she could have earned only one more week's wages, that would have made ten dollars and a half, or two weeks would have made a whole twelve dollars.²⁷

この仕事を耳にしたとき、母は「女の子が町で仕事をする」ということに反対だった。しかしローラは姉の学費のために、この大変な仕事を引き受けた。肩や首が痛くなり、一日の終わりにはくたくたになるほどの辛い作業であったが、家族のために、上記の引用に見られるように、もっともつ

と稼ぎたいと思うのであった。

そして15歳になったときに、教職で月に25ドルという、本人にとっては「途方もない大金」を稼ぎ出すことになるのだが、そのお金は姉のためにオルガンを購入することに使うのである。もちろんオルガンは生きるために必要な物資とは違う「贅沢品」だ。しかし「家族のため」であれば、どんなに「やりたくない」仕事でも、いやむしろ「苦勞を厭わず」全力を尽くすことに意義があると考えているのである。

ちなみに裁縫のアルバイトで9ドルを稼いだあとのエピソードであるが、町の少女たちの間で「サイン帳」や「名刺」が流行り出す。宿敵ネリーに自慢されたローラは、25セントの名刺がほしくてたまらないが、「ただの遊び」のためにそんな「贅沢」をしてはいけないと我慢する。牧師の養子として育てられているアイダは、そんな「虚栄心」に振り回されることのない「良い子」である。内心「良い子」になれないローラは、ひたむきに我慢する。それを知った両親は、ローラのために25セントを出してやるのだった。

ここまで見てきてわかるように、様々なアルバイトで苦勞をして、雑貨がほしい、素敵な衣類がほしい、家具がほしい、できれば家族のためにオルガンやミシン、農機具を手に入れたいという様子は、高度成長期を迎える物質文明の始まりを暗示しているだろう。しかしメンタリティは「物欲」ではなく(!)、常に「節制」、「虚栄心の慎重な排除」であり、決して「安楽」や「安息」を求めることなく、家族のために(決して自分のためではない)、不断の努力を続ける「禁欲の精神」なのである。

ローラの夫となるアルマンゾの、馬に対する価値観についてもみてみよう。幼少期に馬車製作工場の弟子入りに誘われたとき、アルマンゾは農民となる人生を選んだ。父に職業の希望を聞かれたとき、彼が答えた言葉は「仔馬が欲しい」という返事であった。「商売」という、人との経済的関係性のなかで収入を得る仕事に対して、農民は生きる糧を自分で生み出している。そこでは「自由

と独立」を持つ農民は、誇り高い人間であるという価値観が提示されている。

のちにローラの物語でアルマンゾが再登場するのは、彼が颯爽と2頭の馬の手綱を引いている姿である。

While [Laura] was looking [the green prairie and blue sky], suddenly into the sunny green and blue came two brown horses with flowing black manes and tails, trotting side by side in harness. Their brown flanks and shoulders gleamed in the sunshine, their slender legs stepped daintily, their necks were arched and their ears pricked up, and they tossed their heads proudly as they went by.

“Oh, what beautiful horses!” Laura cried. “Look, Pa! Look!” She turned her head to watch them as long as she could.²⁸

この印象的な馬を引いている姿が、ローラがアルマンゾを目にする初めての場面である。父に言わせれば、あんな素晴らしい馬を見られるのは滅多にある機会ではなく、おそらくは300ドルの価値はあるだろうとのことに、ローラはため息をついたのであった。

その自慢の馬で、ローラは吹雪のなかでも職場に送ってもらうのであり、またその馬が引く軽快な橇、立派な馬車やバギーにもデートで乗せてもらうことになる。アルマンゾは時には借金をしてまでも、新しい馬や乗り物を次々に手に入れる。しかしあれだけ自慢にして世話をしていた2頭の素晴らしい馬が、ある日突然にいなくなっていた。

“What became of the colts?” Laura inquired.
“I sold them.”

“But Prince and Lady...” Laura hesitated.
“I am not criticizing these horses, I just wondered if anything is wrong with Prince and Lady.”

“Nothing is wrong. Lady has a colt and Prince doesn't drive so well without Lady. I had an offer of three hundred dollars for the colts, they're a well-matched, well-broken team and worth it, but you can't be sure of a fair price every day. This team cost me only two hundred. That's a clear gain of a hundred dollars, and I figure I can sell these for more than they cost me, if I want to, when they're broken. I think it will be fun to break them, don't you?”²⁹

驚くことに、アルマンゾは自慢の馬をあっさり売ってしまい、新しい馬との差額で100ドルを得たと満足しているのだ。なによりも大事にして、手間を惜しまず世話をしてきた家畜といえども、決して死ぬまで共にいたいという「友」ではなく、あくまで付加価値をつけて利益を生むという、運用対象の「財産」なのである。様々な乗り物といい、それを引く馬といい、金額を考えながら常に買い替えてゆくその姿勢は、現代ではスポーツカーからワゴン車、高級セダンと乗り換えてゆく趣味のメンタリティと変わらないのか。いや、現代の車趣味は贅沢な「消費活動」かもしれないが、アルマンゾの家畜に対する態度は、1年365日、少しの手も抜かず世話をし、生活の利便性や資産を着実にステップアップしてゆくという、仕事への熱心さの表れなのだ。

前述したヴェーバーは、厳格なカルヴィニストを父に持つフランクリンにとって、貨幣の獲得は、職業に専念すること—それは神から与えられた使命という意味も含む—における有能さを示すことであり、彼の道徳観の根幹をなすものと指摘している。³⁰ローラのインガルス一家においても、アルマンゾのワイルダー家にとっても、資産の「数字」への執着心は、安楽な生活への「蓄財」なのではなく、献身的な「努力の結果を表す数値」なのである。

非現世的、禁欲的で信仰に熱心であるということ

と、他方の資本主義的営利生活に携わるということと、この両者は決して対立するものなどではなくて、むしろ逆に、相互に内面的な親和関係にあると考えるべきではないか³¹

ヴェーバーが指摘しているように、禁欲的に努力を続けること、休まず熱心に働くことは、「結果として」金持ちへの道へつながる、「資本主義の精神」を生み出す土壌を作ったようだ。

近代資本主義を生み出した背景を探ったヴェーバーの先行研究に、ヴェルナー・ゾンバルトの『恋愛と贅沢と資本主義』（1912）がある。ゾンバルトによれば、18世紀の初め以来、ヨーロッパでは奢侈品の需要が拡大し、新興成金から一般市民に至るまで、こぞって贅沢な暮らしをめざして進んでいったという。³²その奢侈品とは、高価な衣服、優雅な家具や装飾品などの、生活必需品以外のものだ。それも「女性が全精力を傾けて促進した」品々である。³³

シリーズを通して、インガルス一家が必死に求めるものは、「禁欲」や「節制」にもっとも厳しいキャロラインがこだわる家具であったりカーテンであったり、立派な衣服など、最低限の生活必需品以外のものだ。もちろんそれは「贅沢」ではないし、「虚栄心」によるものでもない。彼女にとって、きちんとした文化的な生活を送るための、努力の結晶なのである。ゾンバルトとヴェーバーは、共に近代資本主義社会が生まれた原因を探り、それぞれ「奢侈の追及」と「ピューリタニズムの精神」であると主張した。この「小さな家シリーズ」を見る限り、どちらにも一理あるようだ。

ローラは自分の生涯が、アメリカ建国の歴史の1コマを典型的に現すものだと感じていた。このシリーズでは、ローラの幼少期の大きな森を出発するところから始まる。大草原の真っ只中や、川沿いの土手に横穴を掘って暮らした生活などは、ほぼ自給自足の独立した生活だった。しかし後半部は町ができる中での生活だ。*The Long Winter*では、次第に形成されてゆく町の近くで、簡単に板張りされた小屋で暮らしていた。そのときは零

下40度まで下がる猛吹雪が4月末まで続くという異常気象があり、インガルス一家を含め、町全体が飢餓の危機に襲われた。頼みの鉄道が降り積もる雪で不通になり、物資が欠乏したのである。

“If only I had some grease I could fix some kind of a light,” Ma considered. “We didn’t lack for light when I was a girl, before this newfangled kerosene was ever heard of.”

“That’s so,” said Pa. “These times are too progressive. Everything has changed too fast. Railroads and telegraph and kerosene and coal stoves — they’re good things to have but the trouble is, folks get to depend on ’em.”³⁴

ストーブに使う石炭がなくなり、燃やすための木材は手に入らず、家畜のための干し草をかじかむ手で一日中棒状に絞って燃やし続けねばならなかった。ランプに使う灯油がなくなって部屋は暗くなるし、食料は来年度のための種麦を、コーヒーマイルで挽き続けねばならなかったし、それも尽きて飢えが襲ってきた。

「文化的」な生活は、ライフ・ラインのトラブルで、あっけなく崩れ去る脆弱さを持つ。それがわかっていながらも、インガルス一家は物質的豊かさを放棄して自給自足の生活に戻ろうとは思わない。前述したメアリーの立派な服を準備した章で、チャールズは農作物を守るために鉄砲で鳥を打たなければならなかった。残酷なことであるが、その作物は自分たちが食べるためのものではない。“the oats and the corn were cash crops. They would sell for money to pay taxes and buy coal”³⁵そしてなぜか書いていないが、もちろんメアリーを大学に送り、そのために必要とする立派な上等の服などを準備するための資金でもあるのだ。

こういった変化が「独立精神」を否定するものだというつもりはない。豊かな生活を実現するた

めには、アダム・スミスが述べたように「分業」による合理的な経済活動が必須であり、「自給自足」では不可能だ。ローラが自分の生涯を、アメリカ建国の歴史の1コマを現すものだと言うとき、それは人里離れた森や大草原での生活から、町での物質的に豊かな生活に至る経済的発展の歴史でもある。そしておそらくそれが典型的に「近代資本主義」の発展する姿を現すものだと、ローラは意識していなかったのではないだろうか。

¹ “Mountain Grove Sorosis Club Speech, 1936”, Sallie Ketcham, *Laura Ingalls Wilder: American Writer on the Prairie*, (New York: Routledge, 2015), 147.

² *Little House Sampler*, Laura Ingalls Wilder and Rose Wilder Lane, (New York: Harper Perennial, 1989), 217.

³ *The Long Winter* (1940), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1968), 13.

⁴ *Farmer Boy* (1933), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1961), 369.

⁵ マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1920), 大塚久雄訳(岩波文庫, 1989年), 45-48.

⁶ *Little House, Long Shadow: Laura Ingalls Wilder’s Impact on American Culture*, Anita Clair Fellman, (Columbia: University of Missouri Press, 2008), 235を参照。

⁷ 「教会や子どもたちが通う学校を建設する必要性を最も強く感じていたのは女性たちであった。たしかにこうした文化活動の表面に名前を連ねていたのは男性であるが、実質的に計画をねり、募金活動をおこなって実現させたのは女性たちであった」という指摘がある。篠田靖子『アメリカ西部の女性史』, (明石書店, 1999年), 54.

⁸ ジョアナ・ストラットン『パイオニアウーマン: 女たちの西部開拓史』井尾祥子, 当麻英子訳

(リポート、1988年)、207を参照。

⁹ *These Happy Golden Years* (1943), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1971), 263.

¹⁰ 西部開拓の時代には、女性の職業選択肢は極めて限られていたため、生活のためには売春婦となる道しかないことも多かった。開拓初期の時代には、一時的なものも含めれば、半数近い女性が売春に関係していたとも言われている。『アメリカ西部の女性史』、152を参照。

¹¹ 『アメリカ西部の女性史』、76-7。

¹² *Little House in the Big Woods* (1932), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1953), 96.

¹³ *Little House on the Prairie* (1935), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1953), 40.

¹⁴ *Little House on the Prairie*, 123.

¹⁵ *On the Banks of Plum Creek*, (1937), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1965), 218.

¹⁶ *By the Shores of Silver Lake*, (1939), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1953), 95.

¹⁷ *By the Shores of Silver Lake*, 142.

¹⁸ *Little House, Long Shadow*, 88.

¹⁹ *Little House, Long Shadow*, 235.

²⁰ *Jane Eyre: An Autobiography* (1847), Charlotte Brontë, (London: Oxford University Press, 1933), 472.

²¹ *Little Town on the Prairie* (1941), Laura Ingalls Wilder, (New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1965), 92.

²² *Little Town on the Prairie*, 96.

²³ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、286.

²⁴ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、292-3.

²⁵ *These Happy Golden Years*, 148.

²⁶ *The Long Winter*, 16.

²⁷ *Little Town on the Prairie*, 56-7.

²⁸ *By the Shores of Silver Lake*, 261-2.

²⁹ *These Happy Golden Years*, 189.

³⁰ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、48.

³¹ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、29.

³² 『恋愛と贅沢と資本主義』(1912), ヴェルナー・ゾンバルト, 金森誠也訳, (講談社学術文庫, 2000年), 174.

³³ 『恋愛と贅沢と資本主義』、198.

³⁴ *The Long Winter*, 192-3.

³⁵ *Little Town on the Prairie*, 98.